

直江津港をいかしたまちづくりシンポジウム 開催概要

- 1 実施日時 平成 21 年 12 月 5 日（土）午後 2 時 00 分～4 時 30 分
- 2 会場 直江津港佐渡汽船ターミナル 2 階ホール（上越市港町 1-9-1）
- 3 参加者数 約 70 人
- 4 概要 基調講演（30 分）
「今、なぜ直江津港か」
講師 戸所隆所長（高崎経済大学地域政策学部教授）
パネル・ディスカッション（90 分）
・パネリスト
小島富美子氏（NPO 法人にいがた湊あねさま倶楽部 代表）
佐藤敦氏（新潟県上越地域振興局直江津港湾事務所 所長）
古川永氏（直江津まちなか市座 座長）
柳澤英次氏（直江津港周辺活性化協議会 会長）
野崎隆夫主任
・コーディネーター
戸所隆所長

(1) 基調講演

講師：戸所 隆 所長（高崎経済大学地域政策学部教授）

演題：「今、なぜ直江津港か」

- ・現代は、工業化社会から知識情報化社会へと時代が大きく転換しようとしている。上越市を取り巻く環境も、高速道路や新幹線などの高速交通路の整備、市町村合併による市域の拡大、中心市街地の衰退、少子化・高齢化、人口減少など、大きく変化している。
- ・一方、環日本海経済圏の成長により、日本の貿易構造は、アメリカを主軸とする環太平洋中心から中国を主軸とする環日本海中心に転換しつつある。また、中国では労働力が高くなってきており、今後、日本企業が中国から戻ってくる可能性もある。
- ・これらの大きな変化を長期的にとらえて、ストロー効果を防ぎ都市を成長させていくためには、港湾などのインフラをいかし、地域外から金や人を呼び込んで都市を拡大させるような産業、すなわち域外市場産業を育成することが重要である。
- ・域外市場産業を立地させるためには、港湾や高速道路などをいかし、人や物の流れを作ることが重要であり、第一に、北関東自動車道などで結ばれる「ひたちなか - 上越ライン」を強化し、東京に依存しない構造を作ると同時に、環日本海経済圏と環太平洋経済圏との一体化を図ることが重要である。第二に、日本海側の新潟から富山・金沢までの地域の連携が重要である。上越市は、これら二つの軸により形成される十字軸の結節点として拠点性を高めていくことが重要である。
- ・港をいかしたまちづくりの条件としては、まず魅力ある中心市街地が必要で、そして、それを港の発展と連動させることが重要である。今の直江津のまちは、海や港を感じさせない。
- ・直江津港をいかしたまちづくりに向けて、市民は今、何をすべきか。第一に、直江津港の重要性を認識すること。第二に、公共交通で暮らせるコンパクトなまちづくり。第三に、直江津港をまちづくりにいかす視点が必要である。市民がまちの将来像を描き、共通の目標に向かって日々努力することが重要である。
- ・市民一人ひとりが、まちの過去・現在・未来を語り、時代の変化をとらえてまちを改良しつつ自分らしく生きる「町衆」として、結集してほしい。



基調講演



講師：戸所 隆 所長

(2) パネル・ディスカッション

パネリスト：小島富美子氏（NPO 法人にいがた湊あねさま倶楽部代表）
佐藤 敦 氏（新潟県上越地域振興局直江津港湾事務所所長）
古川 永 氏（直江津まちなか市座座長）
柳澤英次氏（直江津港周辺活性化協議会会長）
野崎隆夫主任

コーディネーター：戸所 隆 所長

(佐藤氏)

- ・直江津港は古くから栄えてきたが、特に近代的な発展を見せたのは昭和 26 年に重要港湾の指定を受けて以降である。昭和 30 年代前半に河口分離を行い、昭和 41 年には関税法上の開港指定を受けた。その後も経済発展も相まって整備が進み、昭和 52 年に中央ふ頭が完成、この段階で大部分の物流機能が充実した。現在は LNG 受入基地、火力発電所の整備が進んでおり、エネルギー港湾としての発展が期待されている。
- ・直江津港では近年、入港船舶の隻数及び総トン数、取扱貨物量、船舶乗降人員のいずれも減少傾向にあり、特に、平成 19 年の九州・北海道フェリー航路廃止と平成 20 年の小木直江津航路一隻体制・冬季運休への移行の影響が大きい。
- ・直江津港の定期コンテナ航路は、中国・ブサン航路が週 2 便、ブサン航路が週 1 便就航しており、ブサン経由で世界中とつながっている。コンテナ取扱量は、平成 11 年にガントリークレーンを整備してから順調に増加していたが、近年は落ち着いている。
- ・港湾事務所の業務は、港湾施設の整備・修理、施設の管理運営などで、その中で最近重要になってきているのが、国際港湾としての保安対策である。直江津港においても、近年管理を厳しくしている。
- ・一般市民に港に親んでもらう取組として、直江津港フェスティバルを毎年開催しており、また、平成 21 年 3 月に「音楽コンサートと佐渡汽船こがね丸船内見学」を実施した。そのほか、子どもを対象としたみなと見学会を随時開催している。

(野崎主任)

- ・直江津地区ではいわゆるドーナツ化が著しい。北陸新幹線延伸により、市街地が更に拡大し直江津の交通の要衝としての地位が低下することも懸念される。



パネル・ディスカッション



佐藤 敦 氏

- ・このような中、直江津の地域固有の資源、アイデンティティーである港を活用したまちづくりは自然な方向性であると考えます。直江津は海・港にかかわる地域資源を多く持っており、港のポテンシャルをいかしてまちなか活性化を図ることが重要と考えます。

(柳澤氏)

- ・直江津港周辺活性化協議会は、直江津港周辺地域及び国道 350 号沿線地域の活性化、海洋レジャーの振興などを目的として平成 18 年 7 月に設立した。構成団体は、近隣町内会、商工会議所、事業所、350 同友会、上越釣具商組合である。
- ・これまでの取組としては、平成 18 年に釣り大会を実施したほか、平成 19 年からは直江津港フェスティバルの開催に加わっており、毎年多くの客を迎えている。今年は天地人博会場とを結ぶ低床バスを運行するなどし、1 万人を超える来場があった。
- ・これまで県上越地域振興局長、中部電力上越火力建設事務所長、帝石 LNG 受入基地準備室長を講師として招いて勉強会を行ってきたほか、昨年は伏木富山港、今年には新潟港の視察を行った。
- ・佐渡汽船ターミナル周辺が寂しい状況になっていることや、港の管理が厳しくなってきたため釣りがしにくくなっていることが課題であると考えている。

(佐藤氏)

- ・港での釣りについては難しい問題だが、長野県、群馬県などからも釣り客はかなり来ており、それは直江津の財産・ポテンシャルであり、なくしてはいけないと思う。

(古川氏)

- ・直江津まちなか市座は、平成 13 年に直江津駅前のいわゆる跡取り息子などが中心に結成した会で、直江津駅前を核として、主に中心市街地活性化基本計画のエリアを対象として、イベントなどを実施している。残念ながら川向こうの港湾地区は、今まで活動範囲外だった。
- ・具体的な活動としては、直江津駅前の「互の市」を立ち上げたほか、過去には、北海道物産フェアなど、直江津ゆかりのエドウィン・ダンにちなんだイベントを実施したり、「夕遊市」と称して、夏休みに子どもを対象とした工作の実験などをしてきた。
- ・そのほか、今年には国体に合わせて、直江津を PR するためのピンバッジを作成した。
- ・直江津地区では、若い人が郊外に移り住むなどして定住人口が減少し、高齢過疎化が進んでいる。そのような理由から直江津祇園祭はどの町内でも開催が厳しい状況にある。



野崎隆夫主任



柳澤英次氏



古川 永 氏

(小島氏)

- ・にいがた湊あねさま倶楽部を設立した経緯としては、まず、新潟港において朱鷺メッセなど港湾施設の整備が進んだことなどがある。高いところから見下ろしてみて、港の存在を実感し、港町であることを再発見した。その後、行政から声を掛けられ、会を設立するに至った。
- ・活動としては、絵図、地図、絵本を作ったり、港で月見をするイベント「月待ち湊」を催すなどしているが、いずれの活動も、女性の情・感性を大事にし、ほかとは少し違うとらえ方で、独自のこだわりを持った港遊びを実践している。



小島富美子氏

(柳澤氏)

- ・港町直江津の歴史・文化を物語る写真を佐渡汽船ターミナルに展示するなどして、市民や観光客にPRできないか。
- ・佐渡との交流をもっと深めていきたい。佐渡の方を直江津祇園祭に招待したり、直江津港ターミナルを利用して寒ブリ祭などしてもいいだろう。

(小島氏)

- ・このターミナルで運動会をしたらどうか。ロッククライミングなど、いろいろな競技ができると思う。そのような意外なことで人を呼び込めないか。
- ・また、クリスマスの時期などに、窓にいろんなイルミネーションを飾るコンテストをしたらどうか。それによって、港の存在感を示すことができるのではないか。

(野崎主任)

- ・持続可能な地域経済を支える港という視点から見ると、域外市場産業で外貨を獲得し、それによって域内市場産業も活性化させるという好循環を生み出すことが重要だが、域外市場産業を立地させるためには、直江津港をいかすことが重要である。

(古川氏)

- ・北陸新幹線延伸により直江津駅の役割が薄くなることに不安感を持っている。直江津駅を利用する価値を作る方法を真剣に考えなければいけない。そのためには、日本海国土軸の連携を秋田、青森辺りまで見据える必要があるのではないか。
- ・8月に小木で行われるアースセレブレーションを直江津でもPRして、中心市街地にうまく結び付けられないか。

(参加者)

- ・アースセレブレーションでは、直江津へ帰る客を乗せたフェリーを、鼓童が「送り太鼓」で見送ってくれる。しかし、直江津ではそのような意識はあまりないし、また、小木直江津航路が減便になると、両津に回ってしまうことになる。「アースセレブレーションは直江津から」というキャッチフレーズで、佐渡汽船の利用促進を図ることを提案したい。

(柳澤氏)

- ・直江津駅前、中心市街地を中心に、五智地区及び港周辺をも含めたまちづくりが必要だと思う。北陸新幹線延伸を見据えて佐渡汽船ターミナル周辺を活性化させ、関西、北陸地方から多くの客を誘致し、循環バスの運行でアクセスをよくすることにより、観光客、住民の利便性を向上させることが重要と考える。

(古川氏)

- ・地域を活性化するには人がベースにあるので、まずは定住人口を増やす工夫が必要だと思う。そのためは、港をいかして産業を発展させるだけでなく、企業の方から直江津地区に住んでもらうような仕掛けづくりも重要だと思う。

(小島氏)

- ・あねさま倶楽部は、ごく単純に、知的好奇心をくすぐられるから、興味があるから活動している。親しみを持って、また、知的好奇心をくすぐるような取組であるというところが大切である。直江津は名前に「津」が付いている、まさに港。歴史を調べてみたり、自分で歩いてみたりすると、まちが港だということはすぐに分かる。遊びながら学ぶことを覚えると、素敵なことができる。

(佐藤氏)

- ・今ある資源、例えば佐渡汽船ターミナルなどをいかしていきたい。子どもなどが親しみを持ち、また散策できるような空間づくりができればいいと思っている。

(野崎主任)

- ・ここまでの意見交換を総合すると、地域経済の発展を支える直江津港、にぎわいの創出に資する直江津港、交通ネットワークの強化、広域連携の推進などがポイントとして挙げられるだろう。

(所長)

- ・このシンポジウムの一番の目的は、皆さんに港に目を向けていただき、港とまちづくりをつなげて考えてもらうことである。これからも、自分なりに港とまちの関係を考えていただき、上越のまちづくりを進めていただければ幸いである。



コーディネーター：戸所 隆 所長